

## 母子分離不安説からの脱却

萩 昌子（大阪）

### 要旨

キーワード：

### はじめに

教育相談をしていますと、子どもの問題行動の原因は「幼少期の母子関係にある」という説明を聞くことがあります。

特に、不登校については、「母子分離不安型の不登校です」とよく言われます。「母子分離不安」が原因だとすると、当然、母子関係に焦点を当てた対処をすることになるでしょう。子どもの不登校を解消するために母親が不登校の子どもに特別な待遇をすることで問題が解決されたかに見えることもありますが、それは別な問題を作りだす弊害があるように思えます。

そこで、今年度は、不登校の原因が母子関係にあるとして、子どもが登校することを目的に親の対応を考えることの問題点を考え、それに代わる方法を提案したいと思います。

### 1. 「母子分離不安」説の由来

先生方にはあまり関心がないかもしれませんが、母子分離不安説の由来を明らかにしておきたいと思います。母子分離不安説は精神分析学派から出てきています。児童臨床心理学辞典（岩崎学術出版 p. 632）によると、次のように書かれています。「分離不安とは、子どもが片時も離れることができず、親の姿が見えないと異常な不安に襲われる状態をいい、深層心理学的概念である。ジョンソン（Johnson, A.M.）は「分離不安とは、子どもと親—通常母親—双方が相互間に密接な身体的接近を保ちたいという激しい欲求を相手にむけることによって、その行動が特徴づけられるような、1種の病的な感情状態である」と定義している（牧田清志、1969）。精神分析学においては、子どもの幼少時代における母子分離は、重要な外傷（trauma）の 1 つに考えられてき、その分野の研究は、精神分析学の発展に貢献してきたといえる。（中略）ジョンソンらは、学校へ行きたがらない子どもたちの中で、心因によるものを学校恐怖症（school phobia）と名づけ、その心的機制は分離不安であるとのべた（1941）。つまり、ジョンソンらが今から 56 年も前に言い出した説なのです。

## 2. 「母子分離不安」説を卒業しませんか

### 1) 「母子分離不安型」って本当にあるの？

筆者は不登校の相談を受けてきましたが、実際に「母子分離不安型」を見たことがありません。というのは、分離不安の定義を見ると、「片時もはなれることができず、親の姿が見えないと異常な不安に襲われる状態」とありますが、保護者と離れられないというのは登校場面では見られますが、異常という程の不安に襲われている状態とも言いがたいですし、よく話を聞いてみると、母親が買い物に出かける時には平気で留守番できるとか、子ども自身が自分から友人のところへ遊びに行く時には、さっさと一人で出かけるという場合がほとんどだからです。これらの点で「母子分離不安型」の条件を満たす子どもに残念ながら筆者はお目にかかったことがないのです。登校拒否は分離不安が原因だと見る人は、登校場面という一面だけを見てそう思い込んだのではないのでしょうか。

そもそも、子どもが苦手な場面に躊躇し母親にしがみつくのを見て、「母子分離不安」が原因と決めるのは適切ではないと思います。たとえば、水泳をいやがる子どもが無理にプールに入れられようとしたときに、プールサイドの柱にしがみついて泣き叫んだとしたら、その子は「柱分離不安型」のプール恐怖症だとでもいうのでしょうか？問題は柱と子どもとの関係にあるのではなく、水泳の苦手な子どもへの指導法にあると考えるべきではないのでしょうか。筆者は不登校は学校場面という課題と子どもとの間に存在することがらだと考えます。

### 2) 登校拒否理解は変わってきている

日本における登校拒否についての理解はこの10年間だけでもたいへん変わりました。文部省が平成元年に「学校不適応調査研究協力者会議」を発足させ、平成4年にその会議の最終報告が出されました。その報告では、「登校拒否は特定の性格をもった子どもに起こる」とする従来の考え方から、「どの子どもにも起こり得る」と変わってきたのです。不登校の原因を子どもの固有の問題と考えるのではなく、学校や環境の要因が大きいと考えられるように変わってきました。そして、個々の子どもに応じた再登校の取り組みが学校に求められるようになりました。登校はしないけれども学習塾には通う子、定期テストは受けるという子が珍しくなくなりました。そして、中学校時代に再登校できなくても、卒業後は進学したり就職したり、元気にやっている子が多く見られるようになりました。

### 3) 母子関係を重視する根拠は？

対応については、不登校の原因を母子分離不安であると考えたと、当然ながら、親子関係を改善することで不登校を解消することができるかと考えることとなります。母親と子どもの未熟な依存関係をいかに克服させるか、それぞれの個の自立をいかに達成させるかということが基本になるのですが、母子分離させることが目的になっているため、なかなか分離できない登校拒否の子どもと母親を離すために、入院治療とか児童相談所の一時保護所に子どもを入所させて指導するというような方法もこの原因論に基づく処遇から派生しました。けれども、実際には効果がなく現実にはこの方法はとられなくなりました。そして、母子の未解決な問題を改善することが重要視され、対応としては、まず乳幼児期に母子関係の中で獲得されるべき基本的信頼感を獲得し、その次に自主性を獲得するように援助することによって子どもが積極的になり再登校に至ると考えられるようになりました。さらに、思春期の登校拒否の子どもについても、依存と自立に揺れ動く時期ととらえ、基本的信頼感の基礎をしっかりとするために幼児的な要求も受け入れるようにすべきであると考えられています。つまり、母親が子どもを十分甘えさせることによって子ど

もが自主性の発達の遅れをとりもどすという考え方です。20年程前、平井信義氏らが「登校拒否は自主性の発達のおくれによって生じている」と述べ、教育相談においても採用されてきました。このような考え方は、「母性愛」という言葉に見られるように母親に特有の神秘的な力が子どもの問題を改善できるとする世の中の常識に合致していたり、幼少期の子育てを任せられ子どもの育ちについて自分の責任を強く感じている母親にとっては反論しがたいため、世の中に受け入れられやすかったのであろうと推測されます。これはかつて自閉症研究の初期には原因が母親の育て方にあるという考えが主流であったことにも似ています。しかし、この考え方は母子関係にばかり関心を向けていて、母子関係の問題が解消されない限り学校にはできないことがないように聞こえます。

#### 4) 登校はだれの課題？

平井信義氏は著書「登校拒否児の治療教育」の中で、「自主性が発達すれば、必ず自発的に登校する (p. 49)」と述べ、自主性を育てるためには子どもに自由を与えることが必要であり、子ども自身が生活を正常化することから回復期が始まり、登校していないということを除けば年齢相応の青年の生活になってくると登校は目前であるとも書いています。

しかし、子どもが登校できるようになるためには母親が「甘え」や「自由 (わがまま)」を受け入れるなど献身的に努力するという生活の中では、登校という子ども自身の課題を子どもが自分で解決すべきだとは考えず、責任性を学ばないという大きな弊害があるように思われます。

また、平井氏が言うように、自主性が発達すれば、必ず自発的に登校すると断言することはできません。なぜなら、登校するかしないかは子ども自身の決断にかかっているからです。どんなに元気になっても (自主性が発達したからこそ?)、「学校には行かない。行きたくない」と宣言する場合も起こり得るはずです。それは、公教育に頼らないで自分たちで学びの場を作りだそうとする立場をとる子どもやその保護者がいることでも明かでしょう。

登校するかしないかは基本的には子どもの課題ですから、子どもの判断を尊重し、子どもがどのように解決していこうとするかについて相談相手になり、自分の人生を自分の責任で歩む力を育てることが大切だと筆者は考えます。

子どもがある課題につまづいている時、家族が相談相手になり勇気づけられることは大切です。しかし、子どもの相談相手になり勇気づける関係があったとしても、子どもの学校での課題が自動的に解消するわけではありません。たとえて言うなら、家族関係がよくても、父親や母親の勤め先の職場の問題そのものが解消されるわけではありませんし、むしろ、家族の支えがあれば転職する勇気が湧いてくるという場合だってあるかもしれません。

ところが、保護者が「子どもを安定させ自主性が発達すれば子どもは登校してくれる」と考えて子どもを見ていると、子どもが元気になると「ぼちぼち学校へ行けるのでは…」という親の期待が強くなるのは当然でしょう。しかし、子どもに登校の意志がなければ、親からの登校圧力を下げるために子どもは元気でない様子を示さなければなりません。つまり、子どもからすれば、元気であることと登校することとは表裏一体のものと感じられるので、子どもはうっかり元気にはなれないでしょう。そうなると、保護者は自分の関わりがまだまだ十分でないためだと自分を責め落胆する場合もあるようです。自主的に登校してくれることを夢見て、母親が努力を続けるというのは、「再登校」のみが「立ち直り」の証明であった時代の産物であり、しかも、家庭内にさまざまな問題を引き起こしたり、問題を深刻にしていると筆者は考えます。

以上のように、「分離不安」の定義に該当する不登校は実在しないという観察、登校拒否理解の歴史的変遷、責任性と自立の重視という視点から、不登校の原因を「母子分離不安」と見るこ

とは適切ではないと筆者は考えます。教育関係者にも根強く広まっている考え方ですが、そろそろ卒業するべきではないでしょうか。

筆者は、子どもが学校とどのようにつき合うかは本来子ども自身の課題であり、また、子どもの人生は子ども自身のものであると考え、子どもの責任感と自立を重視する立場で教育相談をしてきました。子どもの自立を援助するには、「母子関係」を重視し幼児段階にたちもどる必要などまったくありません。学齢期に達した子どもの責任感と自立を育てようとするならば、乳幼児期の保護・依存関係に子どもを引き戻すことは不適切な行動を助長することにしかありません。社会の一員を想定した対等で協力的な人間関係におけるコミュニケーションや年齢・能力相応に権利と責任性を学べるように働きかけることが必要だと考えます。一言で言うならば、「学校には黙っていても自分のことを再優先にしてくれるお母さんはいないし、会社にはお母さんはいなくて来てくれない」ということです。以下に、母子分離不安説が問題を複雑にしていたり、弊害をもたらすことについて事例を通して報告します。

### 3. 事例を通して

#### 事例1：幼稚園の頃から登園拒否をしていたMくん

(「母子分離不安」説が事態を深刻化していた例)

入学直後から学校に行きたがらないということで母親が相談に来られました。

経過を聞きますと、幼稚園の時にも行きたがらなくて困り、ある相談所へ行ったことがあるが、母子分離不安があるので十分愛情を示すためにしっかり子どもを抱きとめてかかえこんであげてくださいと指導を受けた。いやがる子を幼稚園へ無理やり連れていくことに疲れ果て休園させる決心をし、Mへ愛情を示す努力をしてきたとのことでした。

学校へ行かないだけでなく、家でも気に入らないことがあると暴れたり、言うことを聞かないのでとても困っていると母親は話しました。また、しっかり抱きしめたりしてきたつもりだが、子どもはよくならないと嘆いておられました。「小さいときからやりにくい子で、言うことを聞かないので時には叩いたこともありました。最近、Mには「甘え」が必要だと思って接していると、父親や祖父母はMを甘やかすすぎだと私を責め、父親は厳しくしないといけないとMにつきあたるのです。私も努力しているのだから父親にもMにやさしくしてやってほしいと頼むのですが、聞き入れてくれません。私がこんなに努力しているのにと思うと腹が立ってきて、Mの育て方のことで夫婦げんかになります。私があの子を中心にできるときはいいのですが、来客があったりすると言うことを聞かなくなるので叱ってしまいます。また、だれかに気に入らないことを言われた時でも私にあたってきます。パニックになると、何が気に入らないのか私にはわかりませんが、他の人にはわからないようです。家族の中では私の言うことを一番聞いてくれるのです。あの子の気持ちは私にしかわからないのです」と話されました。

母親は自分以外の人にはこの子は扱えないとされていて、Mくんも自分が困ったときには母親が解決するものだと思っているように見えます。母親はMくんを甘やかすすぎだと家族から非難されます。Mくんは、もっと厳しくしつけなくてはと考える父親や祖父母から厳しく叱られます。家族からきつくあたられるので、さらに母親と子どもが排他的な密着関係を作っているように筆者には思えました。そのため、母親が自分のことよりも他の人のことを優先するとMくんは怒るのでしょう。このままでは、Mくんは学校という場面に出ていくと困るでしょう。なぜなら、自分で感情をコントロールしたり、自分の意見をことばで相手に伝える練習ができていないからで

す。子どもに母子の一体感を体験してもらおうとか「甘え」を十分受け入れるというような方針は、いたずらに、母子関係をさらに密着化させ、「自分は特別で誰よりも守られていて安全でなければいけない」という子どもの生活感覚を増長させていると筆者は推測しました。

相談のポイントは次のとおりです。

\* まず、パニックへの対策を考えました。母親は子どもがだだをこねて要求を通すのをやめさせようとして、Mくんが暴れると叱るのですが、彼の暴れ方がひどいのでその場をおさめるには言い分を聞いてやるしかないという結果になっていました。母親には、最終的に要求を受け入れるのならMくんがことばで頼んでいるうちに聞きいれるように提案しました。これは十分甘えを受け止めるためという考えではなく、学校（社会）に出て行っても使える社会適応スキルとしてことばによる要求行動を学習してもらうことが目的です。

\* 「Mくんが父親や祖父に叱られてパニックになると、言ってきたのは母親の責任、Mのパニックを治めるのも母親の責任、叱られたことに対するMへのケアも母親の責任と思ってたくさんかかわっていませんか」と筆者は母親に確かめました。よく考えると、母親がいるときに限って子どもはパニックを起こしていて、子どもは母親の出動を見込んでパニックを起こしているようだということに母親は気がつきました。そして、母親はMくんには感情をコントロールする能力があり、母親がいなくても他の人に対応する力はあるとMくんを信頼しようと考えようになりました。

\* 登校は本来子どもの課題とみなします。「登校してくれるのなら・・・」と考え、母親はMくんを中心に生活していましたが、そもそも親は登校の手伝いはできても、登校するのはあくまでも子ども自身です。一方、学校では、Mくんが登校すれば担任以外でも対応できるように受け入れの体制を整えてくださいました。そこで定期的に先生と保護者と筆者と三者の話し合いの場をもち、当面の目標を話し合う会をもちました。

第1段階：学校が安心できる場となること。

Mくんは先生が話しかけても応じる気配がありません。対応する先生は、母親とくっついているMくんと無理に話しようせず、母親とMくんが家でしているように教室でも過ごせることを目標にしました。先生の前でも母親と勉強をするようになりました。

第2段階：先生と遊べること。

母親はMくんが登校をしぶる日は無理に連れていくことはしませんでしたので、登校する日は機嫌よく登校し、学校で元気に過ごせるようになりました。先生はMくんの興味ありそうな教材を用意して、一緒に遊べることを次の目標にしました。遊びの中で「次はこうしてみないか？」と先生から提案されて先生と子どもと一緒にやれることは学習への準備となります。

第3段階：母親に頼らず、先生がMくんに対応すること。

遊びから発展して先生と勉強ができるようになってきました。けれども、Mくんが勉強をいやがっている様子や他にMくんのしたいことがわかってしまう母親は、ついつい「今日はこれ以上は無理みたいですね」と先生に伝えたり、「もう少しがんばってやりなさい」とMくんを諭したりしてしまいます。母親にすれば、Mくんの様子を見ていて「これ以上続けると怒り出す」とわかってしまうようです。Mくんは気に入らないことがあると感情的になります。そうすれば、今まで家でもそうであったように母親が助けにきてくれると予想するからです。そこで、次の目標としては、母親は学校へついて来るだけで、Mくんの対応は先生に任せることを筆者は提案し

ました。この時期は先生にとっても母親にとっても勇気のいる段階だと思います。母親は M さんの扱いになれていない先生に任せる勇気がありますし、先生には M さんが感情的になった時にも適切な対応が求められます。

#### 第4段階：先生と M さんとで意思確認ができること

母親は学校へついていきますが、M さんから離れて座るようにしました。先生は M さんの素振りで察することをせず、「算数はやめて漢字をしようか」、「今日はこれくらいにして帰るか」というように言葉で確認し、M さんの選択（意見）を尊重するようにしました。やめたい時には不機嫌にならなくても、ことばで言えば先生は応じてくれること、お母さんに代弁してもらわなくても先生とやっつけていけることが M さんにわかってきました。先生と飼育小屋へ行くなど、母親と離れて先生と過ごすことができるようになっていきました。

登校して先生と勉強するということが定着してくると、次にはクラスに入ることが目標となります。教室に入った時にも学校になれる段階と同じ手順を踏みます。母親がいることを M さんが希望したら一緒にいてもらいますが、教室でのことは担任の先生に任せるようにしました。

母親から次のような話を聞きました。

「M が続けて登校できるようになった頃、『行きたくない』とぐずった日がありました。以前の私なら、『せっかく続けて登校できるようになったのだから、なんとか登校させなければ』と考えて、登校させようと M を説得したと思いますが、この時は、『がんばって続けて行っていたものね。じゃあ、今日はお休みするのね』とあっさりと言うことができました。なんとか登校させなければと子どもを説得してもきっと子どもは応じないでしょう。そうなれば、父親が『そんなことでどうする！』ときつく叱るでしょう。すると子どもはパニックになり、悲惨な朝になったことと思います。幼稚園の頃はそうでした。でも、今回は私があっさりに対応したことで、父親も『それもそうだな・・・』と同意してくれました。父親が叱るのは、私が子どもを説得しきれないのを見て私を応援しているつもりだったのかもしれませんが。それに、以前だと『子どもともっと遊んでやってほしい』と私がしつこく言ったのですが、最近は父親と M とのことは二人のことと思って、私は何も言わないのです。父親は M を連れて遊びに行くようになりました。M は気に入らないと暴れるということもなくなりました」

3学期からは母親は教室まで送っていただけでよくなり、2年の体育大会を終わった頃から母親が送る必要はなくなりました。

家庭でも、母親は M さんと家族との関係は当事者に任せるなど、いろいろと努力されてきました。並行して、学校の先生とも定期的に話し合い、目標を確認することで M さんへの対応を効果的にすすめることができました。このように、子どもの学校適応には先生の援助が不可欠なのです。

#### 事例2：姉と犬猿の仲の J さん（姉の不登校は解消したが別な問題を作りだした例）

「1歳違いの姉との中が非常に悪い。妹が姉の持ち物を盗ったり壊したりする。姉の教科書を隠したりするので困っている。いくら叱っても言って聞かせても効き目がない。姉はがんばりやで、勉強をまじめにする子。でも妹の方は勉強が苦手で、おしゃれのことばかり考えていて私は妹の話聞く気になれない」という相談でした。さらに、母親は経過次のように話されました。「実は姉は小学校の高学年で不登校になりました。相談したカウンセラーは、「お母さんとの関係

をやり直さなければならない。添い寝をするなどスキンシップでしっかりかまってあげてください」と言われました。その結果、姉はなんとか登校するようになりました。姉の不登校の時には姉が不安定でいらいらしていたのでずいぶん妹にがまんをさせました。それがいけなかったのでしょうか。この子もかまってやらなければならないと思うのですが、どうもその気になれません。妹が物を盗ったと姉から苦情がくると叱らないわけにはいきませんし」。

これを聞いて筆者は次のように考えました。

母親は姉の不登校の時に添い寝をしたり姉の要求をできるだけ受け入れるなど、甘えさせることによって子どもは登校するようになったと考えています。このような考え方は、「学校には行くべきで、勉強する子はよい子」という親の固定した価値観を残したままで、しかも「愛情」を注ぐことで子どもは期待どおりに育ってくれると考えていて、子ども自身の責任感を育てることにはつながりません。親の努力に応じて不登校を乗り越えた勉強好きな姉と勉強嫌いでやっかいな妹という図式ができていて、どうやら、姉の方が母親の関心を引き出すことに成功しているようです。姉は問題を起こした結果、母親と親密になるということに成功しています。妹のとする行動の可能性は、不適切な行動によって母親の関心を引きだそうとする場合と、姉が母親の期待に応えたのに対して、自分は親の思い通りにはならないでおこうとするかのいずれかが起こりがちです。

姉の不登校によって母親が添い寝をしたりたくさんかまったことはきょうだい間の競争を激化したと推測しました。

相談のポイントは次のようです。

\* 姉の物を盗るという見方をしている母親はなんとかやめさせなくてはと厳しく叱っていました。筆者は盗るという見方より、「物の貸し借りの交渉・合意がうまくやれていない」と考えようと母親に提案しました。

相手の合意を得ずに物を使ったり借りた物を返さないと気持ちよく物を貸してもらえるか、あるいは、困ったことを母親に解決してもらおうとするのは適切な方法か、などということは姉妹ふたりの課題です。母親は姉妹の間のトラブルに巻き込まれています。ふたりのトラブルはふたりに任せるように母親に提案しました。

\* 母親は妹にも愛情を示さなければならないと思いつつ、腹立たしく感じてしまうと自分を責めていました。母親は勉強をがんばる姉との会話を楽しめますが、おしゃれの話ばかりしてくる妹の話は聞く気になれないと言います。このような場合、妹への愛情不足と見るよりは、母親の価値観の問題と見た方が扱いやすいと筆者は考えます。愛情は自然に沸き起こるものという感じがして、自分でもどうしようもないと感じるかもしれません。けれども、価値観は考えであり自分の意思で扱いやすいという印象を与えます。

そこで、子どもへの期待（価値観）の幅は広い方がよいこと、勉強好きな子はそれでいいし、おしゃれに関心があるのもその子どもの特徴、おしゃれに関心があることは将来の職業選択（自立）にもかかわってくるでしょう。勉強をどのようにするかは子どもの課題です。親の好み（勉強する子が好き）で子どもの価値を判断するのではなく、その子の持ち味を大切に、子どもが自分に自信をもち社会に出ていく勇気を養うことは親としての責任であることなどを母親と話し合いました。

3ヵ月間（4回）の相談の結果、子どもの行動、家族の雰囲気は次のように変わり、相談を終了しました。

「盗った盗らないというもめごとには立ち入らないことにしました。なくなった物がもどって

きているとか、貸した物を「遅れてごめん」というメモつきで妹が返してくれたとか、姉から報告がありました。姉から妹に手紙を書き、仲直りをしたらしく、一緒に出かけたりするようになりました。妹に対する私の考えも変わりました。勉強もせずにおしゃべりばかりしていると思って小言を言っていました。この子はこれが好きなんだと思って話を聞くようにしました。すると、楽しそうに話をしてくれるようにもなりました。家の中はとても平和になりました」

#### 4. 「母子分離不安」説を採用した場合と責任性と自立を重視する違い

原因を母子分離不安とみて、「甘え」を受け入れ母子の絆を強める対応は分離不安を解消するどころか、母親と子がより密着し、社会一般の人間関係から離れていくように思えます。中学生の不登校にも母親の愛情不足によると見る人がいたり、暴力を「甘え」の表現として親は耐えて受け入れるべきという考え方があることには驚いてしまいます。暴力という手段を受け入れることは子どもの不適切な行動を容認していることになります。暴力ではなく、ことばによる要求行動を学べるようなプログラムが必要です。ことばが暴力よりも信頼できるものであることが理解できれば、次の段階としてことばで相談・交渉することも可能となります。あるいは、親が「子どものため」という大義名分で親の好みや価値観で子どもの課題に介入していることがトラブルを引き起こしていることがよくあります。これは子どもの暴力以前の問題です。また、子ども自身が登校したいかしたくないかにかかわらず、親が子どもを「登校させること」を目標にして子どもへの対応を考えることは、子ども自身が考え子どもなりに判断すべき課題を親が肩代わりしてしまっていて、子どもは自分の人生に自分が責任をとるということを学べないと筆者は考えるからです。

けれども、「母子分離不安」説や「甘え」を受け入れる説は、世の中に浸透しています。それは、子どもに登校してもらいたいという願いを親の力で実現できるものなら努力は惜しまないという親の気持ちにフィットするからなのでしょう。

しかし、これは、言い換えれば、親が愛情を示すことによって子どもの生き方をコントロールできるという誤った信念であり、このような親の信念を強めることは、子どもの自立につながるとは言いがたいと筆者は考えます。このような信念こそが依存・支配関係の現れではないでしょうか。この関係を温存したままで、子どもの退行は必要とする考えは、子どもを自立させるどころか成長期の貴重な時間を浪費することにしかならないと考えます。

「登校は子どもの課題」と考え責任性と自立を重視する関わりとの違いを整理して表にしてみました。ただし、この方法が絶対正しいわけではありませんし、万能でもありません。子どもを信頼し子どもの人生は子どもの自身の責任とするには勇気が必要です。保護者にこのように提案する限り、相談員自身の暮らし方が問われます。子どもに任せることが放任にならないよう、また、責任をとることが罰とならないようになど、実際の相談では気をつけなければならないと考えます。

#### おわりに

「母子分離不安」説は、責任性という観点で見ると問題が大きいと筆者は考えます。子どもに学校に行かせたいとか問題行動を止めさせたいために、母子関係を改善しようとしたり、十分な愛情を示そうとすることは、愛情を子どもを支配するための道具として使うということにな



	乳幼児期の母子関係に遡って 母子関係を改善しようとする	子どもの意見を尊重し年齢に 応じて責任性と社会性を養う
家庭生活	<p>＜家庭内で特別扱い＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●登校させてあげなくてはと親が考える</li> <li>●登校できない子どもに特別サービスする</li> <li>●疾病利得があり子どもが暴君化する</li> <li>●きょうだいが競合する</li> </ul>	<p>＜家族の一員＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●登校を考えるのは子どもの課題</li> <li>●登校してもらうために特別サービスしない</li> <li>●不登校の子どもだけに限らず、家族の適切な行動に注目する</li> </ul>
社会生活との関連	<p>＜母親の防波堤に守られて＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●他の家族からの攻撃に対して母親が子どもの防波堤になろうとする</li> <li>●子どもを甘やかしていると見る家族と母親が対立し、子どもと母親が孤立しがち</li> <li>●母親との関係に閉じこもりますます社会の人間関係から遠ざかる</li> </ul> <p>＜無理な行動・暴力に耐える＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●無理な要求や暴力は甘えの表現・愛情の確認なので、がまんして受け入れる</li> </ul>	<p>＜子どもが対応できると信頼する＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●不登校の子と家族との関係は両者の課題、母親が調整するのが当然と考えない</li> <li>●子どもが自力で他者に対応する機会を奪わない</li> <li>●社会の一員を想定した対等な関係を重視</li> </ul> <p>＜適切な要求行動をトレーニングする＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●適切な要求行動を学習するよう対応する</li> <li>●要求を断る時には丁寧に断るモデルを示す</li> </ul>
登校に関して	<p>＜元気になりきれない＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●元気になると登校への期待が高まるので、うっかり元気になれない</li> <li>●親子関係を維持するために登校する日もあるが、継続しない</li> <li>●登校はまだ無理だと親に思わせるように元気でなくなる</li> </ul> <p>＜深刻な不登校＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●親の努力にもかかわらず、子どもが登校できないと、問題が根深いとか重症というレッテルをつけられる</li> <li>●親はまだ愛情不足を解消できていないと挫折感を抱き、疲れはてる</li> </ul>	<p>＜元気になっても大丈夫＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●元気になっても、いつ、どのように登校するかは子どもの課題</li> <li>●子どもから援助を求められればできるだけだけの援助をする</li> <li>●登校には至らないが、悩まず元気に過ごせる</li> </ul> <p>＜明るい不登校＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●休んで気ままに暮らしていると見られる</li> <li>●子どもの決断を尊重する。親の責任を問われない</li> </ul>
学校との関連	<p>＜親子関係の改善が先決＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●親子関係が原因とみてしまうと学校での子どもの課題が見えなくなる</li> <li>●親が学校の対応に不満をもっている時は、問題は母子関係にあると教師が見ると、学校と親は対立し、信頼関係を築けない</li> </ul>	<p>＜教師ができる援助をさがす＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●子どもが何を身につけると学校生活が過ごしやすいか教師は考える</li> <li>●親の育児がどのようなものであれ、教師として子どもを理解し、子どもと信頼関係を築けるかが教師の勝負</li> </ul>

りかねません。それでは、愛情とは名ばかりで、親の好みを子どもに押しつけているにすぎないと思うのです。

親の子への愛情とは、成績の良し悪しや世間からの評価の良し悪しにかかわらず、子どもを思う気持ちであるはずで。

「母子分離不安」説を脱却して、学校と家庭の協力関係を築き、子どもの自立を促す働きかけを進めていただけるように願っています。

## 更新履歴

2012年9月1日 アドレリアン掲載号より転載